

壁越しの再会「寝物語の里」

(米原市長久寺)



中山道柏原宿の東、1kmあまりの所に、幅50cmほどの小さな溝がある。滋賀と岐阜の県境で、その昔は近江と美濃の国境だった。溝の両側に旅籠が建ち、旅人は壁越しに「異国」の人と話ができたという。源義経の側室・静御前が、ここで旧知の家臣と壁越しに再会を喜んだという伝承から、「寝物語の里」と呼ばれている。



▲「寝物語の里」は美濃と近江の国境。二つの宿屋は、壁越しに話が通じ合ったといわれる

幅50cm水路の国境

中山道の60番目の宿場柏原宿(米原市)の近くに、「ねものがたりのおさと」と呼ばれるところがあると聞いて、民話か絵本の資料館でもあるのかと思った。子どもが寝る時に話して聞かせるおはなしの類の「起源」か何か、かと。意味はだいたい違ったが、町の名称としてありそうにない柔らかい響きにワクワクした。

さらに、その辺りの県境は細い水路で区切られていて、ひとまたぎで滋賀から岐阜、岐阜から滋賀へと越えられるというではないか。そのような場所に、今回の特集テーマである「源平」がどのように関わっているのかはさておき、実際に見て「またいでみたい」と現地まで車を走らせた。

国道21号を関ヶ原方面に向かい、名神高速道とJR東海道本線、中山道が入り組む辺りが「寝物語の里」と呼ばれる場所。司馬遼太郎の「街道をゆく・近江散歩」にも、「近江路のなかで、行きたいと思いつつ果たしていないところ」の一つとして紹介され、「そこから近江がはじまるという小溝の場所」と、最初に登場する。



▲国境の近江側に建つ標柱

寺の跡がほぼ更地のような状態で広がっているのをはじめ、中山道の両脇には宿場の名残のような旧家があり、一般的な現代家屋、倉庫、柿の木やススキが生えているちょっとした空地——などが見られる。そして、たぶん司馬さんが訪れた時にはなかったであろう「近江美濃両国境寝物語 近江国長久寺村」という立派な石碑が建っていた。

その足元に、確かに幅50cmほどの水路がある。水路の両脇には、これも最近建てたであろう「滋賀県」「岐阜県」の石柱が、それぞれの側に設置されていた。水路の両脇は石垣で美しく補修され、長さ30mくらいが地表に露出しているほかは、中山道と国道21号の下をくぐっている。道路やライフレインが軒並み整備されていくなか、この細い溝を埋めずにわずかでも残し、しかも良好に保存してい

ることに、日本も捨てたもんじゃなないなど嬉しくなった。
さて、ではまずは、またいでみよう。右足が岐阜、左足が滋賀。飛び越えることもできる。一瞬にして県を移動。寝そべってもみた。頭は滋賀、足は岐阜。大きな川や、道路の上の見えない線で区切られている県境はいたる所にあり、それについても一瞬で県境を越えられるということに違いないのだが、この小さな溝をびよんと越える、というのが楽しいではないか。ひとしきり飛び跳ねて小溝の県境を満喫し、寝物語の里を後にした。

静御前にまつわる伝承

そういえば、今回のテーマは「源平」で



▲50cm幅の水路が今も県境。ひとまたぎで国境を超える

あった。この地がどうして寝物語の里と呼ばれるのかも知りた。ということで、寝物語の里から車で5分くらいの場所にある柏原宿歴史資料館(桂田峰男館長)を訪ねた。まずは柏原宿について。滋賀県内には草津、愛知川、鳥居本などの大きな宿場があったが、なかでも柏原宿は最も長く、約13町(1.4km)の間に戸数344軒、人口1468人、本陣と脇本陣が各1軒、旅籠屋が22軒あった。名物の「もぐさ屋」は、最盛期には10軒が商い、賑わっていたという。
『山本町史本編』によれば、江戸時代、近江と美濃の国境には、近江側に亀屋、美濃側に両国屋という旅籠があったという。二つの宿屋は、歌川広重の浮世絵「木曾海道六十九次」の今須宿の場にも描かれている。その両国屋が江戸時代に刷ったという木版の資料には、「此所を寝物語と申ハ江濃軒相隣り壁を隔て互に物がたりをすれバ其詞通じ問答自由なるゆへなり」と由来が記され、さらに、こんな物語が伝えられている。
——壇ノ浦合戦(1185年)の後、源頼朝の追討を受けた源義経が奥州に逃れたとき、その後を追った家臣・江田源蔵がこの地の宿



▲柏原宿歴史資料館の桂田峰男館長



▲近江のなかで最も長い宿場だった「柏原宿」

に泊まった。一晩中、宿の主と話すうちに、ふと名前を名乗ったところ、隣国の宿に泊まり合わせた義経の側室・静御前がその声を寝物語に聞き、壁越しに名乗る。静も義経を追って来たが、付き添いの侍が討たれ、一旦は自分も覚悟を決める。しかし、生きていくうちにもう一度愛しい人に会いたいと、ここまで来たのだった。翌朝、二人は一緒に旅立つ——

常盤御前の説も

「この話はあくまでも伝説で、平治の乱(1159年)に敗れて東国に下る源義朝を追う、常盤御前と家臣の江田行義の話だという説もあります。いずれにしろ、小さな国境をはさんで、偶然にも起こりそうなエピソードという、いかにも起りそうなエピソードですね。それが、時代を超えて、義朝、義経という歴史のスーパースターの登場によって語り継がれているということこそ意味があり、これを大切に守り伝えていきたいですね」と桂田館長。

山本義経と近江源氏の蜂起



長浜市長浜城歴史博物館学芸員
太田浩司
(おわた ひろし)

近江源氏の挙兵

保元合戦(1156年)

以来、平清盛の一門が高位・高官につくことで権勢を極めた平氏政権に対して、後白河法皇の周辺からクーデターの動きがみられ始めた。安元3年(1177)6月の「鹿ヶ谷の陰謀」である。ここに反平氏のため集った一人・俊寛が、鬼界ヶ島に流された話はあまり有名である。治承4年(1180)に至ると、後白河法皇の次男で、清盛が外祖父となる弟の安德天皇に先を越され、皇位につけずにいた以仁王が、嵯峨源

氏の源頼政の勧めにしたがって平氏追討の令旨を發した。これが全国の源氏に届けられ、日本各地で平氏政権の転覆を目指す源氏の蜂起が起きる。

近江も例外ではなかった。後に源頼朝に支持され、摂政・関白に登りつめた公卿・九条兼実の日記「玉葉」は、「治承四年十一月二十一日の条」で、「近江国、又以て逆賊に属き了んぬ」と記している。さらに、伊勢国に向かう途中の平宗盛(清盛の三男)の郎従が、近江国瀬田(大津市)、野路(草津市)で襲われて十余人が殺害され、首がさらされたという事件も記している。この一連の事件の張本人は、兼実によれば近江源氏の一族だといふ甲賀入道、それに山本兵衛尉であった(「玉葉」には「山下」とあるが、後述する「吾妻鏡」の記述をとって「山本」と表記する)。山本兵衛尉こそ、源頼朝や木曾義仲の祖に当たる源義家の弟・新羅三郎義光の末裔

で、「吾妻鏡」で山本義経と記される人物である。甲賀入道とはその弟(あるいは子)の柏木義兼のことであった。なお、この山本義経と、頼朝弟の九郎義経とが別人であることは言うまでもない。

山本はどこか

「尊卑分脈」という比較的信頼性がある系図集によれば、義経は源義光のひ孫に当たる。その系図で義経の父とされる義定も山本を名乗っているから、父の時代から近江国に土着したものであろう。同系図によれば、義経の子には、箕浦冠者義明、山本義弘、柏木義兼、錦織冠者義高らがいたとある。一方、「吾妻鏡」や「諸家系図纂」によれば、この柏木義兼は、義経の弟と記されている。これらの人物が義経の子か弟かは不明だが、義経については弟とするのが一般的なようだ。実は、山本義経の本拠「山本」についても



▲山本山遠景

諸説ある。近江には山本村が三つあるのだ。神崎郡山本(旧五箇荘町)、蒲生郡山本(日野町)と、浅井郡山本(旧湖北町)である。この内、湖北の山本山の麓に鎮座する朝日山神社境内には、山本義経が鎧をかけたという松の伝承が残る。現在繁る松は、もちろん何代目

かのものであるが、近江の山本三ヶ村の内、地元で義経伝承を伝えるのは、浅井郡山本が唯一である。先の義経の弟や子どもたちの名前を見ると、柏木は甲賀郡の地名(旧水口町)であるものの、箕浦(旧坂田郡近江町)、錦織(旧東浅井郡びわ町)は湖北の地名であ



▲山本山ふもとの朝日神社境内にある「鎧掛松」



▲「鎧掛松」の説明書き(朝日山神社)

る。このように、地元伝承の存在、息子たちの本拠の密集度から言えば、山本義経の本拠は浅井郡山本村と考えるのが至当であろう。

平氏軍との戦い

九条兼実は、12月に至っても近江の反平氏軍のことを記述している。9日には、延暦寺の衆徒が義経に味方し、三井寺に立て籠もり、平氏の本拠六波羅に夜討をかけようとしたとある。しかし、これは近江国の平氏軍によって阻止され、翌日の10日にも義経・延暦寺軍と平氏軍の衝突があり、11日には平氏軍が三井寺周辺を焼き討ちした。この一連の戦いで、延暦寺側4人の首がさらされ、平氏側も80人以上が負傷したと記述する。

続いて、16日には、重ねて平氏軍が義経の本拠・山本城を攻撃したとある。24日には、山本義経と柏木義兼が山本城(これも「玉葉」では「山下城」と記される)に籠城、平氏の追討軍が攻略できずにいる状況が記されている。さらには、尾張・美濃で挙兵した源氏軍がこれに加わりうとしていた状況まで記される。しかし、何とか治承4年中に平氏は近江を制圧したようで、翌年「正月十八日の条」では、平氏軍が美濃国に入り、同国源氏の中心的存在だった源光長の城を攻めたことが記されている。ただ、山本義経らの城が落ちたのか、落ちたとしたら義経がどこに逃げたのか、兼実は残念ながら記述していない。ところが、鎌倉幕府が編纂した史書である

源氏系図



長浜の独自のなまちづくりと共に歩む
長浜デザイン工房(株)元氣や
TEL.0749-63-3746

種子島(鉄砲)のご縁で生まれた長浜の味

茅平

長浜店 長浜市元浜町8-19 TEL.0749-65-5546
大手門店 長浜市元浜町6-17 TEL.0749-65-5544

福

長浜市大宮町4-13 TEL.0749-63-3746